

平成13年度 日本都市計画学会賞 選考経過

平成13年度学会賞候補として議論の対象となったのは、会員からの推薦（石川賞7件、計画設計賞3件、論文賞6件、論文奨励賞12件）、さらに研究論文集、学会誌一般研究論文、学位論文から学術委員会ならびに学会賞委員会が推薦したもの（論文賞1件、論文奨励賞6件）である。

その中から、学会賞委員会（全17名）が慎重に検討した結果、審査対象として石川賞5件、計画設計賞3件、論文賞7件、論文奨励賞18件を選び、審査対象とした。

学会賞委員会は、その業績・論文・計画設計について、2名の審査委員によって査読または現地調査を実施、その評価を書面で提出願ひ、学会賞委員会席上で結果を照合、討論、協議し、最終審査結果を理事会に諮った。

こうして、本年度の学会賞は、石川賞2件、石川奨励賞1件、論文賞1件、論文奨励賞7件、計画設計賞1件、計画設計奨励賞1件の計13件の受賞が決定した。

< 石川賞 >

「まち育て」を育むー対話と協働のデザイン

受賞者 千葉大学工学部都市環境システム学科 教授 延藤安弘 殿

行政主導の「都市計画」に代わってようやく定着してきた「まちづくり」の実態が、実は市民参加とは無縁のモノづくりにすぎなくなりつつあることを批判し、それに代わる新たな言葉として「まち育て」を提唱したものである。受賞対象の2冊の著書には、受賞者の基本的な考え方と実践活動がよくとりまとめられている。受賞者が直接かかわってきた対話と協働を重視した内発的で持続的な取り組みの紹介に基づく論の展開は、非常に説得力がある。著書は、いずれも啓蒙的であり、新しい概念の提起とそれを裏付ける数多くの実践活動は石川賞にふさわしいと判断される。

中国における歴史都市の保存再生に関する研究と著作

受賞者 中国の歴史都市保存再生研究グループ 代表 大西國太郎 殿

代表ら8名の研究者は、中国の研究者と共同で、1986年から94年まで中国の西安市、1995年から99年まで黄山市で実施した歴史都市の保存再生に関する調査を実施した。西安市は、現況調査を踏まえ、景観保全の課題を、高度地区、歴史的建造物周辺、伝統的合院住宅の町並みに集約し、特に伝統的町並みに焦点を絞って、詳細調査を踏まえた保存再生の提案を行っている。黄山市について典型的な住宅地区の詳細調査を踏まえて、建物を分類し、地区を8ブロックに分けて段階的な再生を提案している。この作業の一環として、現地に民家を修復・復元した民家博物館が実現した。

また、これらを踏まえ、中国の18の都市・集落の都市計画上の問題点を解析した著書
を出版している。京都を中心とする日本の歴史的地域の保存再生の経験を、日中共同
研究により、中国の歴史都市の保存再生に生かし、系統的な実態調査を踏まえた提案
を行い、その一部を実現している点で、中国の他都市、アジア諸都市への啓発性を含
み、石川賞に値する。

< 石川奨励賞 >

三大都市圏政策形成史（証言 首都圏・近畿圏・中部圏）

受賞者 三大都市圏政策形成史編集委員会 委員長 山東良文 殿

受賞対象となった著作はわが国三大都市圏の政策の形成過程、政策内容、その特色
を、時代毎の社会経済の動向と連動させながら描いている。本書は2部構成となっ
ている。第1部は大都市圏政策の歩みを、1)戦前期から高度成長期まで、すなわち国土
庁発足以前の時期、2)経済の安定成長期からバブル期まで、すなわち国土庁発足以降
の時期、3)バブル崩壊後の成熟時代の現在、といった3時期に区分して、三大都市圏
政策を通史的に記述している。第2部では、三大都市圏政策の重要突飛区、大規模プ
ロジェクトに焦点を当て、当時の政策担当者からの証言という形でその、特質、政策
背景を描いている。

以上のごとく、本著作は大都市圏政策の背景にあった思想、制度背景にまで踏み込
み、しかも当時の政策担当者達の多数の証言、当時の資料を掘り起こし、三大都市圏
政策を体系的に記したという点で大きな成果を収めている。以上の点で、本著作は石
川奨励賞にふさわしい業績と考える。

< 論文賞 >

土地区画整理事業の換地制度

受賞者 政策研究大学院大学政策研究科 教授 下村郁夫 殿

土地区画整理事業は、我が国の市街地開発事業の中で最も歴史が古く、多くの問題
を抱えながらも、今日、最も多用される事業制度である。しかし、都市計画研究にお
いて法制度研究、特に事業制度研究はその重要性にもかかわらず、比較的手薄な分野
であった。著者も指摘するとおり、土地区画整理事業の法理を正面から対象に据え、
解析する作業はこれまで十全には行われてこなかった。建設省で土地区画整理法改正
を担当した著者は、その法理に関心を抱き、その後、多数の文献を渉猟し、本論文に
おいて、土地区画整理事業の換地制度に焦点をあて、照応原則、小規模宅地対策、借
地権の取り扱いの問題点を、既存の諸説を踏まえながら周到に解析し、換地割付基準、
一般的な申し出換地制度の導入、小規模宅地対策の適正化のための制度拡充、借地権
等の権利再編成の手法、換地以外の交換手法、連結・統合による複数の事業の結合等、
土地区画整理事業の法制度とその運用の多岐にわたる改正・改善策を果敢に提案して
いる。全体の論理構成が明晰で、それぞれの箇所での論証も既存の諸説を周到に吟味

し、それに基づいて大胆であるが論理的に手堅い提言を行っている。学術的に優れているのみならず、論文のテーマ、法制度の提案も適時性があり、都市計画研究に貢献するところ大きく、論文賞に値すると判断する。

< 論文奨励賞 >

伝統的農村集落における道空間の形態と形成要因に関する研究 －甲府盆地の平坦地に立地する集居農村集落を対象として－

受賞者 山梨大学工学部土木環境工学科 助手 大山 勲 殿

この論文は、甲府盆地の伝統的農村集落の道空間を丹念に分析した研究を内容としている。都市の計画におけるアノニマス性に迫ったもので、都市計画におけるオニマス、すなわち「つくられた空間」に見られる強度な人為の限界性を容易に理解させ、しかも批判に止まらず、新たな計画クライテリアの提案に及んだものである。具体的には、車社会以前の道の形態とそれが形成された要因を系統的に解明したものである。

本研究は、着眼点に優れ、目的が明解で、それを達成するための課題設定、並びに研究方法が丁寧に検討されており、的確な研究作法として取り纏められているところに評価が集まった。検証データの解釈に多少の議論の余地はあるが、むしろ独創性という利点の評価がそれを上回った。また特定対象の研究であるため、普遍性に欠ける面もあるが、これは学術研究が持つある種の運命である。得られた成果から「道づくりの原理」を指摘し、実用性に迫る研究態度も高く評価された。

イタリアにおける歴史的庭園における保全

受賞者 星美学園短期大学人間文化学科 講師 鹿野 陽子 殿

歴史的庭園(ヴィッラ、パルコ、ジャルディーノ)の保全の先進国イタリアに焦点をあて、その保護法制、保全理念の形成、保全への取り組みを、緻密な文献考証に基づいて、体系的、論理的、実証的に解明した力作である。第一章の保護法制では、歴史的庭園が歴史的・芸術的要素(1939年法律第1089号)と自然美(1939年法律第1497号)の二つの側面から評価・保護されていること。面的規制(1939年法律第1497号)がなされていること。環境財(フランチェスキーニ報告)として評価されていること。第二章の保全理念では、ヴェネツィア憲章に至る修復理論の発展、1981年の歴史的庭園イタリア憲章の制定に至る経緯と、その内容を紹介し、庭園を生物的自然空間と規定していること。第三章の保全の取り組みでは、1980年以降の、詳細な事前調査の充実、税制優遇措置、目録作成指針に見られる歴史的・環境特性記述の指示を明らかにしている。学術論文として優れているのみならず、我が国の文化財保護法に基づく歴史的庭園保全の対策の現状と将来について、幅広く多岐にわたる問題を提起している。今後の研究の発展が期待され、論文奨励賞に値すると判断する。

マスターアーキテクト方式を用いた建築集合体の環境設計方法

受賞者 京都工芸繊維大学工芸学部造形工学科 助手 北尾靖雅 殿

極めて短期間で設計される現代の建築集合体は古来からの都市や集落とちがって、歴史的時間による多様性と秩序の自然な調和は望めない。そこで、設計者同士の交渉過程を取り入れた設計プロセスを意図的に行うことで、一つの構想をもった全体性（Wholeness）のある質をもつ建築集合体の設計を目指すマスターアーキテクト方式が提案されてきた。

本研究はこれまで漠とした期待に止っていた MA 論について、①協働設計方式 29 事例分析で設計プロセスや調整行為内容を把握、②南大沢 15 住区事例で設計連携の形成構造を考察、③滋賀県立大事例で MA と BA 間の合意形成方法や設計内容の展開法を考察するなど、設計現場のプロセスを徹底して分析、これを論理的に再構成する手法で、MA 方式の本質と有効性を明らかにした。

以上、本論文は今後益々社会的要請が昂まるであろう MA 方式の設計方法について、詳細に解析を積み上げた先駆的研究として高く評価される。

近代日本における国際リゾート地開発の史的研究

－ 1930年代国際観光政策に伴うリゾート空間の形成について－

受賞者 広島国際大学社会環境科学部建築創造学科 講師 砂本文彦 殿

我国の「国際観光」政策について、国際収支改善、外貨獲得の有力な政策（国策）として、それがどのように政策となり、制度化され、実施されていったか、その流れを多くの資料にあたり、史的によくまとめている。また、「国際観光ホテル」の用語の由来や、今も建築的に価値のある「国際観光ホテル」（蒲郡ホテルや川奈ホテルなど）の建設の経緯やその建築設計などの資料も豊富に盛り込んでおり興味深い。

現在我国の国際観光は完全に出超である。海外からの観光客の入込数は、低迷しており、国際的に比較しても低位にある。これは国際的に魅力のない、訪問に値しない国（都市）という格付けがなされているといっても過言ではない。地域づくり、都市づくりの観点からも大いに反省するとともに、これからの展望を描くことが必要である。その意味でも、本研究のテーマとなっている国際観光政策の史的研究は意義のあるものといえる。

今後は著者も述べているとおり、国際観光戦略として、整備されたホテルやリゾート地がどのように使われ、その政策的効果はどうだったのかといった政策評価の検証が必要であり、また、これからの我国の観光政策及びその連動する都市・地域づくりについての提案・展望も重要である。

ル・コルビジエの「現代都市」に対するパリのジャーナリズムの論評に関する考察

受賞者 豊橋創造大学経営情報学部 玉置啓二殿

ル・コルビジエによる「現代都市」が発表された総合美術展覧会（1922年11月1日～12月20日）に合わせて1922年の12月～1923年1月までの間にパリで発行された定期刊行物を閲覧、調査し、その中から「現代都市」について言及している68編の論評記事を見出し、これら全てを対象として、当時のパリ・ジャーナリズムにおける「現代都市」に対する論評を考察している。

考察は論評の背景や論評相互間の関係、また論者と展覧会やその主催者との関係等に及んでいる他、論評に対するコルビジエの対応、反論を併せて紹介し、『ユルバニスム』に至るコルビジエの探求の足跡の一端を当時のパリのジャーナリズムとの関係で明らかにしている。

膨大な資料の検索、読み取り、その体系的整理など多大な労を伴った論文であることは想像に難くなく、その努力を評価し、また収集した資料のより一層の活用による新たな展開を期待して、論文奨励賞に充分値すると評価する。

東京都の都心居住確保に係わるインセンティブ制度の効果と居住環境に関する研究

受賞者 The University of Seoul Dept. of Urban Engineering 講師 南珍殿

本研究は、都心居住確保のためのインセンティブ制度が、住宅供給とともに住宅ストックや居住環境確保に対する効果を明らかにしている。具体的には「都心居住に関するインセンティブ制度」として、市街地総合設計制度、中高層住居専用地区、地区計画の三つを取り上げて、3制度の比較分析（各制度の特徴と運用実態、インセンティブの活用状況と住宅供給実績、経済状況変化と開発主体、供給住宅の居住水準、住宅の利用実態と居住環境の確保）、インセンティブ付与条件のあり方（地域特性に応じたインセンティブ制度の活用、インセンティブとまちづくり手法との組み合わせによる乗数効果、開発者や地権者が選択できる幅広いインセンティブの重視）を検討している。

これにより、地区特性に合ったインセンティブ制度のあり方及び住宅の質や居住環境の向上を図るためのインセンティブ制度の枠組みを提案している。

しかも本論文はインセンティブ制度を実態とあり方を示した論文として、今後の発展が期待できる。よって、日本都市計画学会の論文奨励賞に値すると考える。

環境共生都市の都市空間形態に関する研究

受賞者 国立環境研究所交通公害防止研究チーム 研究員 松橋啓介殿

コンパクトシティと自然とのふれあいの両面から見た都市のあるべき空間形態をモデル的に示した論文である。自動車交通削減を目的としたコンパクトシティと、自然

とのふれあいを目的とした共生型地域の双方をあわせもつ都市の空間形態を示した点が大きな特徴と言える。また多重意志決定分析を導入することによって、主体の価値観を反映した計画手法が提案できることも、分析のみにとどまりがちな都市解析の研究が多い中で好感が持てる。今後の研究の発展に対する期待も込めて、論文奨励賞にふさわしいと判断した。

以上 論文奨励賞

< 計 画 設 計 賞 >

和歌山県御坊市島団地再生事業

受賞者	御坊市長	柏木征夫殿
	神戸大学・平山研究室 代表	平山洋介殿
	現代計画研究所・大阪事務所 代表	江川直樹殿

1959～1969年に建設された中層耐火の公営64戸、改良159戸、総数223戸の建物老朽化、生活困窮化、コミュニティ荒廃化からの再改良事業で、1990年から取り生まれ、15～30戸のグループに分けて順次建設が進められ、現在6グループ129戸が実現している。

現地に島団地対策室が設営され、グループ毎に徹底した各40回以上のワークショップ方式により、住民・行政・設計者の協働による計画・設計・建設が進行した。この中で、個々の住民の生活再建問題を支援するケースワーク・プログラム、地域の人間関係再生を図るコミュニティ再生プログラム、コーポラティブ方式による集合住宅設計プログラムの三つを組み合わせ実践している。

この粘り強く進められた実践を通じて、設計面においても空中街路ネットワーク、COMMONルームの分散配置、分節化され変化と解放性のある住棟配置など、従来の集合住宅地にはない魅力のある社会的空間の実現に成功している。

実験的な社会的設計として、現代都市計画の理論と実践に寄与する重要な作品成果を挙げており、本学会の計画・設計賞にふさわしいと評価する。

< 計 画 設 計 奨 励 賞 >

晴海トリトンスクエアにおける地元主体による事業化、管理運営に係わる取り組み

受賞者	晴海を良くする会 会長	江間洋介殿
	晴海一丁目地区市街地再開発組合 理事長	澤田光英殿
	中央区都市整備部長	吉田不曇殿
	晴海を良くする会 事務局長	落合庸人殿
	(株)日建設計東京事務所 副代表	安昌寿殿

晴海トリトンスクエアにおいては事業推進の当初段階から地元主体の組織（「晴海を良くする会」）の立ち上げがあり、自らによる計画の提案、又、その後には調査や設計、関係機関協議等を進めるための地権者による会社の設立、さらに開発協議会の設立から事業の実施、そして施設の管理運営に至るまで多くの段階において、地元を中心として事業化、管理運営のための様々な工夫、努力がなされている。さらに、一つの計画のもとに二つの異なった主体による2つの再開発事業の実施、そして事業間の容積、公共施設整備費、共通費用の適正な分担等通常ではなし得ない様々な工夫ある取り組みもなされている。

この種の大規模再開発事業は、多くがディベロッパーや不動産事業者等が中心的な役割を果たして事業化されるのが一般的である中であって、トリトンスクエアにおいてはこのように地元主体で事業がなされており、この間に多様な、また多数のコーディネート作業があったことは想像に難しくなく、この意味で計画設計奨励賞にふさわしい優れた事例と判断される。

2002年 日本都市計画学会 功績賞・国際交流賞 選考経過

2002年における日本都市計画学会功績賞・国際交流賞は、理事会のもとに設置された功績賞・国際交流賞選考委員会が、理事・評議員から候補者の推薦を受け（功績賞候補者16名・国際交流賞候補者8名）、その中から選考委員会で慎重に検討した結果、功績賞4名、国際交流賞4名を選考し、理事会に推挙した。なお、外国人に対する国際交流賞の授与は当面、日本・韓国・台湾の3学会交流国際都市計画シンポジウム関係に限定して行なうこととし、今回の台湾在籍の2名については、3学会交流国際都市計画シンポジウムの開催地において、国際交流に貢献した者を対象に表彰することとし、平成14年度は台湾で開催されるので推挙された。

功績賞受賞者

大久保 昌一 殿

大久保先生は、我が国都市計画の計画論について長年にわたり一貫して思索を深められ、都市計画学の進歩・発展に寄与された。欧米の都市計画論を早くから多数の翻訳書によって紹介されるとともに、自らの思索を、著書「有機的都市論」を始め、数多くの論文として学会誌、研究誌等に発表され、サイエンス・シティ論、サステイナブル・シティ論など時代をリードする先端的な理論提起を、学界のみならず広く社会に対して行ってこられた。理論を実践する面においては、「関西文化学術研究都市」プロジェクトを始め関西における主要な都市計画プロジェクトに中心的に関わり指導され、関西都市計画の発展に大きく寄与されている。

川手 昭二 殿

川手先生はわが国のニュータウン事業の計画、設計、建設、管理運営の全てにわたって携われ、指導的役割を果たされた。具体的には、日本住宅公団職員として、首都圏の多摩ニュータウン、港北ニュータウン、筑波研究学園都市において現場の責任者等を歴任され、完成に導いた。また、事業過程の段階から、様々の角度より研究対象としてニュータウン事業の経験を理論化され、計画理論の向上に勤められた。

また、公団退職後は、筑波大学社会工学系教授にお転じられ、社会工学類長、社会工学系長などを歴任されて、草創期にあった、筑波大学第三学群社会工学類都市計画専攻分野の立ち上げに指導的役割を果たされた。

早川 文夫 殿

早川先生は当学会創立時に入会され、1951年から1975年までの長期に亘って評議員を勤め草創期の学会活動に大きく貢献された。1965年には名古屋大学建築学科教授、1975年から1980年には名城大学建築学科教授に就任され、多く

の後進を育て、現在これらの人が都市計画分野で活躍している。また、この間名古屋市を始め、多くの審議会等の委員を歴任され、都市計画の指導的役割を果たされました。当学会中部支部設立には発起人として尽力され支部の顧問として現在に至っている。名古屋大学名誉教授、日本都市計画学会名誉会員である。

廣瀬 盛行 殿

廣瀬先生は東京大学、都立大学、明星大学において長年都市計画の研究および教育に貢献され、千葉市をはじめとして、多くの都市において都市計画の実践を指導された。都市計画学会の理事、副会長を歴任し、学会の発展に大きな貢献をされた。とりわけ、学会の刊行「石川栄耀論文集」の編纂にあたっては中心的な役割を果たされた。

国際交流賞受賞者

蔡 添壁 殿 (Tsai Tien-pi)

蔡添壁 (Tsai Tien-pi) 先生は、現在、中国文化大学教授である。日台交流の初期段階から、台湾にわが国の都市計画研究の成果を紹介するなど、その交流に尽力された。また、先生の紹介された孫文思想に基づく平均地権制度の考えは、日本の研究者にも影響を与えた。尚、1975年東大日笠研に在籍し、1980年には東大から工博、1982年には、中国文化大学で博士の学位を取得するとともに、イリノイ大学にも留学されている。

張 世典 殿 (Chang Shyh-dean)

張世典(Chang Shyh-dean)先生は東京大学大学院にて都市工学専攻、修士、博士号取得。(’70～’76年)シンガポール大学都市計画大学院専任 Lecturer, Senior Lecturer、(’76～’81年)台湾淡江大学教授、国家公務員簡任官試験、都市計画部門最優等合格、(’81～’98)中華民国内務省営建署次長、国立建築研究所所長、建築学会会長、都市計画学会理事長。台湾において都市計画の発展に貢献するとともに、日韓台の都市計画学会の交流、シンポジウムの開催に尽力された。現在は中国文化大学教授である。

佐藤 昌 殿

佐藤先生は内務省国土局、戦災復興院計画局、建設省、東京農業大学などにおいて、長年にわたり都市計画、公園緑地に関わる実務、研究、教育において多大な貢献をされ、その間に学会活動あるいは IFLA や IFPRA などにおいても国際交流に尽力されてきた。また、「日本公園緑地発達史」「欧米公園緑地発達史」「中国造園史」「西洋墓地史」などの著書、「オープンスペース」「都市に多くの緑を」などの訳書、学協会誌における原著論文など、多くの出版物を通して、北米、欧州をはじめとする国外の都市計画、

公園緑地を先導して紹介し評価されてきており、98歳のご高齢の近年も、アメリカ、ヨーロッパをはじめとする世界10地域を紹介した「佐藤昌が見た世界のゴルフコース発達史」を著している。今日に至るまでのこうした一連の功績は、日本の都市計画に大きく貢献するとともに、実務、学術研究、教育に多大な影響を与えつづけている。

丹下 健三 殿

丹下先生は東大建築学科卒業後、東京大学教授を経て、現在同名誉教授。日本を代表する建築家として世界に知られ、海外の主な作品にスコピエシティセンター再建計画（1966年）、サウジアラビア国王宮殿（1982年）など数件あるが、建築単体のみならず、都市設計に新境地を開いた功績は大きい。1961年に発表された東京計画1960は斬新な都市デザインによって国際的な注目を集め、日本の都市計画・設計の水準の高さを国際的に示すことに貢献した。その優れた業績、国際貢献は、国内では、朝日賞（1965年）、文化勲章（1980年）を受章し、海外では欧米6カ国より8勲章・大賞を受賞したことによっても示される。

MITの客員教授をはじめ海外の数多くの大学で講義をおこない、香港大学及び北京精華大学の名誉教授である。海外の建築家協会等との交流も多彩で、アメリカ芸術院名誉会員をはじめとして、ドイツ芸術アカデミー建築部門名誉会員、ドイツ建築家協会名誉会員、アメリカ芸術科学アカデミー外国人名誉会員、フランス芸術アカデミー海外終身会員、アメリカ建築家協会名誉会長、英国王立建築家協会名誉特別会員などとして国際協力に貢献してきた。